

ライフサポートファイルを活用した地域の関係機関との連携の在り方 ～乳幼児期から学校卒業後までを通じて一貫した教育的支援を行うために～

県立長生特別支援学校

1 長生特別支援学校について

本校は、昭和48年に県立桜が丘養護学校茂原分校として誕生し、昭和53年に一宮町に移転。肢体不自由と知的障害を教育部門として、いる。すぐ側には太平洋が広がっており、自然豊かな環境の中で一人一人に応じたきめ細かい指導・支援を行っている。

2 ライフサポートファイル

本校の知的障害教育部門すべての学区を包含する長生郡市総合支援協議会が中心となって作成したことで、本校に在籍している全ての児童生徒が同じファイルを使用できる環境にある。この利点を生かし、学校が各市町村から全児童生徒分のライフサポートファイルを集め児童生徒に一斉配布し活用を進めている。

3 研究課題

特別支援学校のセンター的機能として、生涯にわたり一貫した支援の後押しをするために、ライフサポートファイルを活用した地域の関係機関との連携の在り方や個別的教育支援計画の有効な活用方法を検討する。

4 取組の成果と課題

(1)情報の発信

①保護者に向けて

便りや相談会、研修会等で活用の仕方などのアドバイスをした。受診記録を挟んだり、年齢のページを記入したりする保護者が増えてきた。

②関係機関に向けて

放課後等デイサービス合同連絡協議会、医

療的ケア児者に関する協議会などでファイルの有効性や周知について意見交換を行った。各事業所が作成した支援計画を入れるなど、関係機関でも活用が進んできた。

③東上総地区の教員に向けて

長生郡市の小中学校にファイルの見本を配布し、活用に関する研修会を行った。関係機関との連携の在り方を学び、教師もファイルを活用しながら、子供の育ちを支えていこうという機運が高まってきた。

(2)事例を挙げての検証

対象者のこれまでの支援記録をファイルに積み上げていった。共有したい内容を関係機関に正確に伝えることができ、一貫した支援につながった。子供が安定した生活を送るための有効な手立てであることが分かった。

(3)個別的教育支援計画の見直しと活用

学校と保護者の確認ツールとしていた個別的教育支援計画を「支援の見える化」「校内外での活用」「個別の指導計画とのつながり」の3観点で見直し、ライフサポートファイルの学齢期の記録とリンクするようにした。関係機関の支援内容や役割が明確になり、合理的配慮の提供や必要な支援が切れ目なく引き継がれ、関係機関との情報共有を行いながら支援をすることができるようになった。

(4)課題

長生圏域でのライフサポートファイルの定着はこれからである。活用を推進していくのは各市町村であるが、特別支援学校のセンター的機能として、その後押しのため校内外に必要な働きかけを継続していくことが必要である。